

平成16年度生涯学習まちづくりモデル支援事業報告

－高齢者にやさしく災害につよいまちづくり／東京都神津島村－

伊藤 真奈美 田中 清章¹ 吉賀 成子² 宮本 佳子³

はじめに

本論は、文部科学省による「平成16年度生涯学習まちづくりモデル支援事業」の採択を受け、実施した事業について報告するものである^{*1}。

神津島村と本学との関わりは、全国商工会連合会主催（昭和64）実施の「島の特産品開発」にはじまり、以来さまざまな地域おこしに関する事業を行っている。

また、平成15年度には、観光振興と地域経済の活性化を図ることを目的として発足した、[神津島村 魅力ある「島のみなとまちづくり」協議会]^{*2}に参画し、互いに協働し、島づくりの計画・実践に取り組んでいる。平成16年度は、この協議会が母体となった実行委員会「海道／神津島」^{*3}を設置し、「高齢者にやさしく災害につよいまちづくり」をテーマに、文部科学省「平成16年度生涯学習まちづくりモデル支援事業」に応募しその採択を受け、地域住民と大学が連携し、まちづくり事業実施の運びとなった。

1. 事業の目的

神津島村は、伊豆諸島のほぼ中間に位置し、白砂青松の入江と起伏に富んだ地形を有している。一村一集落で、島の西側約4km²の地域におおよそ800世帯が生活し、平成17年4月現在、人口は2,140人、高齢化率は24%を占めている。5年後には高齢化率30%、10年後には45%をこえると予測されているが、東京から南へ180km

離れた島「離島」という特殊な地域性のため、都市圏では一般的な各種サービスを楽しむことができないという状況にある。

また、村内の道路は入り組み、狭く、坂道が多く、高齢者や障害者などの弱者にとってはかなりの負担となっている。それにも増して、昭和40年代に生徒・学生等、多くの若年層が来島した所謂「離島観光ブーム」によって、本来ならば老後を楽しむ安心して暮らすための伝統的な生活スタイルである「隠居屋（いんきょや）」があった宅地内に、観光客のための中小規模の民宿が続々と建てられた。このことは、それまでの自然と調和した落ち着いた村落景観や住居形態、ライフスタイルを著しく変化させてしまった要因となっている。また現在とは違い、当時はバリアフリーなど高齢者・身障者に対する建築計画的配慮は全くなされておらず、現在ではその住居（母屋）とともに、古くさい時代遅れの様相を呈している。そのため、島全体が非常に生活しづらいものとなっている。

さらに、平成12年7月に震度6弱の「神津島近海地震」を経験し、多くの災害をもたらした。また、平成14年10月1日台風21号襲来など、断続的に自然災害を受けやすい地域でもある。そのため、災害弱者である高齢者や子どもたちを守るために、日頃の備えが必要不可欠であった。

このような背景から、本事業で計画する各講座を実施することにより、地域住民の「高齢者にやさしく、災害につよいまちづくり」についての認識が高まり、高齢者福祉、災害に対する行政・地域住民のコンセンサスが深まると期待し、また、「福祉及び建築・住居学」における大学教育の一環として、「住民」「大学」「各種団体」「行政」が一体となり参画し協働することで、一般社会にそ

家政学部住居学科

1 家政学部住居学科

2 人文学部人間福祉学科

3 人文学部人間福祉学科

の成果を開示し、還元する効果があると考えている。そこで本事業は、今後到来が予測されている「東海地震」、「2人に1人が高齢者」といった自然・社会状況の中で、村民ひとりひとりが快適に暮らすために、官民一体、地域住民+大学が連携した、「高齢者にやさしく、災害につよいまちづくり」をめざすことを目的として実施された。

2. 事業概要

(1) 「老人介護スキルアップ」講座

第1ステップとして、特別養護老人ホーム「神津島やすらぎの里」（定員34名）、高齢者在宅サービスセンター（定員6名）、在宅介護支援センター、高齢者生活福祉センター（定員11名）が入所する高齢者施設「神津島やすらぎの里」の職員等に対して、吉賀講師および宮本助手による「専門的知見のスキルアップ」講座を実施した。

(2) 「高齢者福祉のあり方」講座

第2ステップとして、本学女子学生ボランティアの活用により、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒への「総合的な学習の時間」の素材としても取り上げ、若年層への「高齢者福祉のあり方」を啓蒙することを目的として実施した。

(3) 「在宅介護」講座

第3ステップとして、現在多くの高齢者を抱える家庭の人達等に対して、「家庭内での老人介護方法等の実践・啓蒙活動」を行うことを目的として実施した。

(4) 「福祉住環境」講座

本講座は住宅内の事故及び障害について概説し、その対処法（バリアフリー対策）やユニバーサルデザインの手法などを子供から大人までを対象に「高齢者にやさしく、災害につよいまちづくり」を実践する基礎を養成することを目的として実施した。

(5) 「地震災害につよいまちづくり」講座

2000年7月に経験した地震は、震度7弱の大地震にもかかわらず、阪神淡路大震災（1995年）

のような大災害にならずに済んだのは何故か等、住民の災害経験を生かした対処方法を地域住民・大学が一体となって検証し、それを広く社会に還元することを目的として実施した。また、小中高生対象の「防災につよいまちづくりのためのアンケート」を実施し、子どもたちの現状把握と今後の対応について検討を行った。

3. 事業実施の課題

講座開催までの準備段階では、本事業に係る実行委員会を設け（魅力ある「みなとまちづくり」協議会が母体となった実行委員会「海道／神津島」）を5回開催し、事業（5つの講座）について、事前に意見交換等を行い決定したことで、大きな問題は生じなかったが、講座開催や事業のPRという点では、十分な効果が得られなかった。

第1回講座開催パンフレットのデザインが「何をやっているのかが分かりにくい。」「PR期間・方法が十分ではない」との指摘を受け（図1）、デザインの工夫（一目で分かるようイラスト入りにする、文字を大きくする、分かりやすいレイアウトにする等）や、村内ケーブルテレビで講座の模様を放映するなど、第2回講座の募集に備えることとなった（図2）。



図1 第1回講座開催パンフレット



図2 第2回講座開催パンフレット

実施段階では、第1回講座開催時に、会場手配に手違いがあり、他の講座とブッキングする等のトラブルが生じた。結果、当講座の会場を変更することとなったため、会場設営に手間取る等、開催直前に様々な弊害が伴った。

4. 地域住民の参加実績

(1) 平成16年7月17日(土) 委員会実施内容

第1回委員会が開催され、委員長及び副委員長の選出、実施事業、内容、場所、時期、講座定員等について検討・決定を行った。出席者は11名(欠席1名)に事務局2名を加えた計13名であった。社会福祉協議会、神津島母の会会長、PTA連合会会長、中学校教諭、商工会女性部会長、観光協会等、異種団体に属する地域住民を委員として迎え、今後の取組、実施について意見を募った。委員長には本学田中教授が選出され、委員長により副委員長は女性委員の中から選出されるのが良いとの案に、満場一致で賛成を得、女性委員が選出された。住民は日中それぞれの仕事があるため、夜間の委員会開催の希望が多いことや、講座内容の検討など、委員会と講座実施にあたっての具体的な諸問題の抽出と、それらの対策について活発な意見交換が行われた。

(2) 平成16年度8月23日(月) 委員会実施内容

第2回委員会が開催され、講座内容について、開催時期、場所、対象者の説明と講師陣の紹介がなされた。出席者10名(欠席2名)に事務局1名を加えた計11名が参加した。講座について、定員を超えた場合の対応をどうするのか、特に、特別養護老人ホーム「やすらぎの里」職員対象スキルアップ講座の受講希望者数の確認と講師への可能受講者数確認を事前に行ってもらいたいとの要望があった。また、そのほかの講座受講者の募集方法について、本学へのパンフレットの作成依頼や村のCATV文字放送、広報誌等を利用したいとの意見・要望が出された。

(3) 平成16年9月6日(月) 委員会実施内容

第3回委員会が開催され、在宅介護、福祉住環境講座に対する委員会の協力体制(実施会場の設営、運営方法等)の確認を行った。出席者12名(欠席0名)＋事務局1名の計13名であった。9月6～8日の講座について、委員会の協力体制の確認、住民へのPR方法を検討する必要があるとの意見が出された。

また、受講者の絞込み(講座を必要としていると思われる人、実際に自宅で介護を行っている人等)を行い、ヘルパーやケアマネジャーにも協力を仰いで、直接的に勧誘を行ってはどうかという意見も出された。

①平成16年9月6日(月) 講座実施内容

[特別養護老人ホーム「神津島やすらぎの里」職員「介護技術」スキルアップ講座]が開催された。やすらぎの里職員17名(募集定員10名)が参加し、実際に介護に携わる職員を対象に、本学吉賀講師、宮本助手による、食事、清潔、排せつ、床ずれ、認知症高齢者、移動の介護等、最新の介護技術について講義と実習が行われた。当講座の主要なテーマである「介護者が疲れない介護技術」等の実技演習において、実際に介護を専門に行っている職員から多数の質問やアドバイスの要望があり、講師による指導が行われた。さらに本学から学生ボランティア3名(院1年、人間福祉学科3年、住居学科2年)が協力した。(写真1)



写真1「「介護技術」スキルアップ講座」のようす

②平成 16 年 9 月 7 日（火）講座実施内容

「在宅介護講座」と題し、家庭での在宅介護における最新の介護技術について、一般の方々 20 名（募集定員 30 名）を対象に、本学吉賀講師および宮本助手による講義と実習が行われた。「介護技術」スキルアップ講座と同様、食事、清潔、排せつ、床ずれ、認知症高齢者、移動の介護などについて、最新の介護技術が指導された。高額な福祉用具を使わずに、どこの家庭にでもあるものを代用品として使用するなど、ちょっとした工夫を加えることで快適に介護を行える技術が指導された。参加者は、介護される側と介護する側それぞれの立場を体験し、「指導のとおり実際に体験してみると意外に簡単にできた。」等、感嘆の声があがり充実した様子であった。また、各家庭において困っていることや、これから起こり得ること、不安なことについて、個別に相談・アドバイスがあり、実体験にもとづく有益な質問・回答が得られた。

また、同様に本学学生 3 名がボランティアとして協力した。（写真 2）



写真2「在宅介護講座」のようす

③平成 16 年 9 月 8 日（水）講座実施内容

介護保険による給付制度や市町村の住宅改修助成制度、住宅のバリアフリー（Before-After）をどのように考えたらよいか等、村民 23 名（募集 30 名）の参加者を対象に、本学田中教授、伊藤助手による「福祉住環境講座」が開催された。（写真 3）



写真3「福祉住環境講座」のようす

神津島における住宅改修助成制度については、古い制度であるため現行の可否について確認の必要があるとの指摘があった。住宅のバリアフリーについては、個別に質問・相談がなされ、直面している問題の大きさに関心の高さが窺えた。

また、当日は、ゲストスピーカーとして本学田辺名誉教授（前学長）を招き、本講座終了後、離島住民の自主的な島づくり活動をバックアップするための事業（財）日本離島センター「離島人材育成基金助成事業」について紹介がなされ、人材資源豊富な神津島はそれをもっと自覚し、積極的に参画すべきとのアドバイスがあった。（写真 4）



写真4「離島人材育成基金助成事業」紹介

(4) 平成16年12月10日(金) 委員会実施内容

第4回委員会が開催され、次回開催の「在宅介護」「地震災害につよいまちづくり講座」の実施について、出席者11名(欠席1名)に事務局2名を加えた計13名により意見交換がなされた。まず、小中校生対象に実施するアンケートの内容について、アンケート票原案を田中教授及び伊藤助手が作成し、それをたたき台となるとして意見が出されたのち、内容を決定した(資料①)。「在宅介護講座」については、募集定員と募集の方法について話し合われた。また、講座内容については特養ホーム職員から希望を募り、それに基づいて講義が行われることとなりました。「地震災害につよいまちづくり講座」については1月に小中校生を対象に実施する災害アンケート調査の結果報告と、災害につよいまちづくりについて、神津島の現状をふまえて開催されることが決定した。

(5) 平成17年2月25日(金) 委員会実施内容

第5回委員会が開催され、「在宅介護講座」「福祉住環境講座」に対する委員会の協力体制について(実施会場の設営、運営方法等)、出席者11名(欠席1名)に事務局1名を加えた12名による意見交換が行われた。講座内容について、開催時期、場所、対象者の確認と講師の紹介がなされた。2月25～26日の講座について、委員会の協力体制の確認と前回講座開催での反省、課題などについて話し合われた。

特に、全回課題となったPR方法と参加者募集について、再度確認がなされた。

①平成17年2月25日(金) 講座実施内容

「在宅介護講座」ーがんばりすぎない介護のためにーとテーマを掲げ、「認知症の介護」では、認知症の正しい知識を身につけ、心穏やかでやさらかな介護を行えるために、参加者25名(募集定員30名)を対象に吉賀講師、宮本助手による最新の介護技術が指導された。「移動の介護part2」では、小さな力で大きく動かす、介護者のための移動の介護について、前回の在宅介護に引き続き、実習が行われた。また、前回講座開催と同様、各家庭において困っていることについて、

個別に相談・アドバイスがあり、実体験にもとづく有益な質問・回答が得られた。当日は、前回講座開催と同様、学生ボランティア(同学生)が協力した。(写真5・6・7・8)



写真5 認知症についての講習会のようす



写真6 シーツを利用したベッド上の移動



写真7 移動の介護を実際に体験する受講生



写真8 ベッドから車いすへの移乗

②平成 17 年 2 月 26 日（土）講座実施内容

「福祉住環境講座」－見直そう、子ども達と住まいのケアを主テーマとして掲げ、「あなたのお子さんは大丈夫？」地震から 4 年後の子ども達から学ぶ－神津島小中高生への災害アンケート結果報告、「住まいの安心度チェック」もう他人まかせにしない！自分で診断・改善するバリアフリーと地震対策」と題し、参加者 26 名（募集定員 30 名）を対象に、本学田中教授、伊藤助手による講義を行った。神津島小学校及び中学校、高等学校の各生徒への災害アンケート結果報告（資料②）と、そこから読み取れる現状把握、これから起こり得る問題などについて、住民と一緒に考え対応策を導いた。また、地震時の各個人の対応について項目表を用いた確認チェックと最善策について解説を行った。これに加え、住宅やその周辺の地震対策とバリアフリーについて、事例を交えながら講義が行われた。また、講座内容をより地域住民に還元するために、家庭でもできる災害対策のためのチェック表を配布し、家族全員で楽しみながら点検し、地域防災をめざすための第一歩を家庭防災から始めるための学習のきっかけを生み出した。（写真 9・10）



写真 9 アンケート集計報告の様子

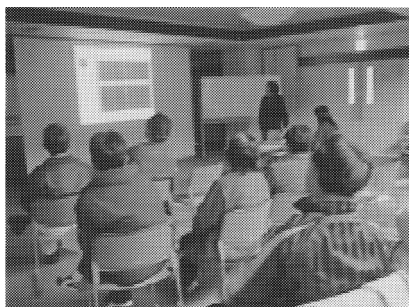


写真 10 バリアフリーと地震対策についての講習会

さらに当日は、ゲストスピーカーとして東京大学三崎臨海実験所所長として 12 年間務められた森沢正昭東京大学名誉教授、現山形大学教授を招き、様々な活動と海辺の生物とのふれあいの面白さ及び必要性が紹介された。「海辺は生物のミラクルランド」と題して、神津島の海辺と海辺に生息する生物を活用したまちづくりの可能性について説明があった。（写真 11）



写真 11 「海辺は生物のミラクルランド」の様子

5. 高等教育機関との連携について

①人的側面

現在、地域住民がどのようなことを問題とし、解決したいと願っているかを抽出することで、問題点を洗い出し、適宜、大学教授、講師より、直接アドバイスを受けることができた。また、講座当日には学生ボランティアが参加し、地域住民との一層の交流を図られた。

②知的側面

事業前年度に発足した【魅力ある「みなとまちづくり」協議会】が母体となっていることもあり、事業の計画初期段階から、大学教員等の学識経験者から意見を求め、相談役として活動の役割を果たしている。講座においては、地域住民の「専門知識と技術」の習得をめざして、本学教授、講師等がアドバイスを行うことができた。また、参加した地域住民間や小中学校間において、問題意識と知識の共有を行うことで、より一層の効果があつた。また、アンケート分析においては、本学学生ボランティア数人によりデータ入力が行われ、講座開催に合わせた迅速な集計結果を得ることが可能であつた。

③物的側面

介護講座では、村内の特別養護老人ホームと、本学所有の福祉用具を使用し、講義・実技が行われた。福祉用具の有無と使用方法の確認や、今後補充する際のアドバイスなども行うことができた。福祉住環境講座では、本学のコンピュータやプロジェクター機器等を持参して活用を図った。

④高等教育機関との連携のポイント

神津島村と東京家政学院大学との関わりについては冒頭で記述のとおり、全国商工会連合会主催（昭和64年）実施の「島の特産品開発」以来、商工会関係2例、行政関係3例の地域興しに関する事業を行っている。今年度は、この協議会が母体となった実行委員会「海道／神津島」を設置し、事業実施の運びとなった。従来からの関わりがあることと、進捗状況のお知らせ、意見交換等のやりとりを日常的に頻繁に行うことで、円滑な連携を図った。

6. 事業の評価について

東京都神津島村は、平成12年7月に震度6弱を体験し、現在は外見的な復興はほぼ達成しているが、新潟県中越地震と同じく震災後の防災対策や心のケアは未整備のままであり、早急な改善が期待されている。また、参加者を募集する段階で、知識や技術を必要としていると思われる家庭を特定し、ヘルパーやケアマネジャーの方々の協力で参加への呼びかけがなされたこと、小中高生対象に防災に対する意識調査を行い、各学校や家庭での防災対策への認識が高まったこと、講習会を行うことで地域住民が一堂に会し、同じテーマで考えることができたことなど、地域福祉や地域防災の意識が根付いた。

介護講座で開催した、特別養護老人ホーム「神津島やすらぎの里」職員対象の“介護技術”スキルアップ講座では、スウェーデンで行われている最新技術を紹介し、後半の時間で実技を実施した。この結果、介護施設等に設備されていた備品のうち使用方法が不明な「滑り板」など、正式な使い方がわかり、これ以後積極的に利用され、意識改革につながった。

また、職員自身が「介護が必要な〇〇さんには、この方法が有効。でも〇〇さんには無理だから、こちらの方法のほうが良いかも。」と、今現在直面している問題について意見を出し合うなど、講師から介護技術が教授されるだけでなく、施設での介護に即した方法を自分たちで模索する契機ともなった。

家庭における介護の方法では、介護する場所・部屋の大きさや設置家具の種類や配置によってどのようにしたらよいかなど、各家庭での問題点が解消されたが、介護の状況は年々変化することが考えられるため、「今後も引き続き、講師にアドバイスを求めたい。」という要望があったことを成果として捉えている。

また、小学校・中学校・高等学校の「総合的な学習の時間」を利用して、大学の学識経験者と地域住民である委員が質問内容を検討し作成した、「防災意識アンケート調査」を児童・生徒に行うことができたのは、大きな成果であるといえる。神津島では津波を想定した村主催の防災避難訓練なども行われているが、大きな地震を経験したにも関わらず、集計結果は「防災意識・準備が希薄である」という予想もしなかった結果となった。しかし、震災後はじめて行ったアンケート調査であること、新潟県中越地震やスマトラ沖地震などの大震災が発生していることを鑑みても、これらの成果を各学校と地域住民に還元することで、あらためて、各個人・各家庭単位による防災に対する認識が芽生えたと期待されます。また官側の防災担当・教育委員会等への還元によって、今後の防災対策のあり方や子ども達の心のケアについても再考する契機になったことが成果となった。

また、今回の経験が一過性の行事として終わらないよう事業終了後も引き続き、官民一体、地域住民＋大学が連携可能な体制を持続することが求められる等の成果をあげている。一島一村だからこそ、官・民・学が一体的に活動しやすく、より一層の協働体制が求められていると考えている。

■注

*1:文部科学省ホームページ「平成16年度生涯学習まちづくりモデル支援事業の募集について」より抜粋。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/02/04021003.htm

1. 事業の趣旨：地域において住民による個性と魅力あるまちづくりを進めるため、生涯学習機関として地域への貢献が求められている大学・短期大学等の高等教育機関の人的・知的・物的資源を最大限に活用することが重要です。このため、本事業では、市町村と高等教育機関が組織的に連携した地域住民の学習成果や能力を活かしたまちづくりの取組について、公募選定の上、事業費を支援（委託費）し、生涯学習まちづくりのモデルとなる取組を推進するものです。
2. 事業実施対象：本事業の申請は、事業を運営するために組織する、市町村、高等教育機関（大学、短期大学、高等専門学校、専修学校）、市民団体、経済団体等の関係者からなる「まちづくり実行委員会」という。）が行うものとします。一略一

* 2: 東京都総務局ホームページ「こうわんだより神津島」より抜粋。http://www.soumu.metro.tokyo.jp/11osima/tayori/tayori_k0312.htm

1. 「島のみなとまちづくり」協議会が発足しました。

東京都港湾局は、この12月4日に魅力ある「島のみなとまちづくり」推進協議会（構成員：都の関係局局長級、各支庁長、各町村長）を設置して、事業の実現に向け動き出しました。本事業は「島しょ地域の活性化のため、地元の発想を活かしながら、港湾や空港の施設や用地を多目的に活用し、各種イベントを開催したり、観光情報の発信拠点として整備するなどの施策を束ね、展開する」ものです。一略一

- * 3: ◎委員長 田中清章（東京家政学院大学教授）
○副委員長 前田美枝（神津島村社会福祉協議会）
- ・清水博可（神津島やすらぎの里）
 - ・中村清美（神津島母の会）
 - ・石野田美代子（神津島商工会）
 - ・清水孝茂（神津島観光協会）
 - ・吉岡栄次郎（神津島村立中学校）
 - ・鈴木好人（神津島PTA連合会）
 - ・伊藤真奈美（東京家政学院大学）
 - ・鈴木幸俊（神津島村福祉課）

- ・前田正代（神津島村教育委員会）
- ・清水正美（神津島村保健医療課）
- ・中村勝二（事務局 / 神津島村）

■資料

- ①本事業成果ホームページ

<http://vill.kouzushima.tokyo.jp/page/matitukuri/index.html>



図3 ホームページ

- ②「災害につよいまちづくり」のための神津島村立神津小学校・中学校・東京都立神津高等学校のみなさんへのアンケート」

★児童・生徒のみなさんへ

地震や台風による被害をふせぐためには、どうすればよいかを、みんなでいっしょに考えてみましょう。まずは、みなさんのようすやきもちを知ることが大切です。で、アンケートにご協力をお願いします。

★小学校・中学校・高等学校の先生方へ

「高齢者にやさしく災害につよいまちづくり」をテーマに、「平成16年度生涯学習まちづくりモデル支援事業

(文部科学省)」の採択を受け、地域住民の方々と大学が連携し、一緒に考えるための協議会が設置されました。その活動の中で、小中高生の方々の意向の把握が重要であると考えています。

アンケートの実施にあたっては、神津島村立神津小学校の3年生から6年生の児童、神津島村立神津中学校・東京都立神津高等学校の生徒の方々を対象としています。お忙しいところ大変恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

アンケート調査は、本協議会の連携期間である東京家政学院大学家政学部住居学科が取りまとめを行っておりますので、ご了承のほどよろしくお願い申し上げます。

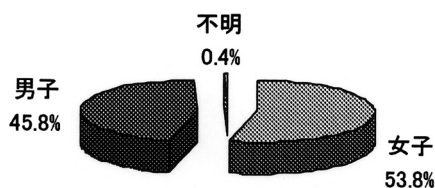
また、このアンケート結果は、住民の方々に開示を行います。

平成 17 年 1 月 10 日

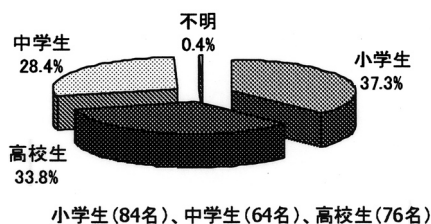
文部科学省生涯学習まちづくりモデル支援事業
2004 年度神津島村「生涯学習まちづくり」委員会

【質問項目と集計結果】

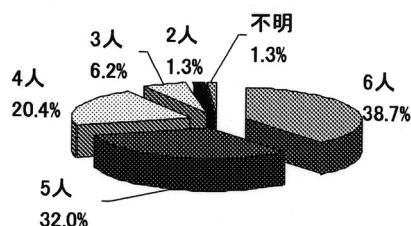
Q1：あなたの性別は？



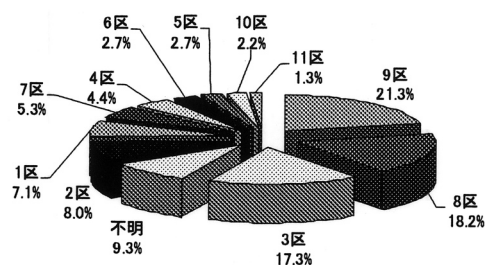
Q2：あなたの学年は？



Q3：あなたを含めた家族の人数は何人ですか？

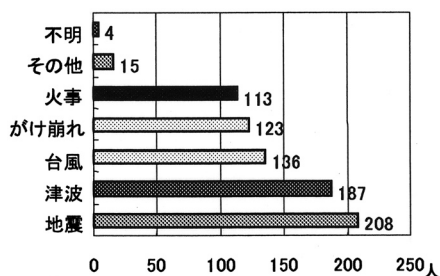


Q4：あなたが住んでいる地域はどこですか？



Q5：「災害」ということばから、どんな「災い」が思いうかびますか？

・回答者数225名、回答数786



神津島村

「災害につよまちづくり」のための

神津島村立神津小学校・神津島村立神津中学校・東京都立神津高等学校

のみなさんへのアンケート

★児童・生徒のみなさんへ

いらい、いらい、いらい、
地震や台風による災害をふくむためには、どうすればよいかな、
みんなでいっしょに考えてみましょう。

まずは、みなさんのようすやまちを知る事が大切ですので、アンケートに
協力をお願いします。

★小学校・中学校・高等学校の先生方へ

「高学年にやさしく災害についてまちづくり」をテーマに、「平成18年度生涯学習まちづくりモデル
支援事業（文部科学省）」の採択を受け、地域住民の方々と大学が連携し、一緒に考えるための協議会が
設置されました。その活動の中で、小中高生の方々の意向の把握が重要であると考えています。
アンケートの実施にあたっては、神津島村立神津小学校の3年生から6年生の児童、神津島村立神津中
学校・東京都立神津高等学校の生徒の方々を対象としています。
お忙しいところ大変恐縮ですが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。
アンケート調査は、本協議会の連携期間である東京家政学院大学家政学部住居学科が取りまとめを行っ
ておりますので、ご了承のほどよろしくお願い申し上げます。
また、このアンケート結果は、住民の方々に開示を行います。

平成 17 年 1 月 10 日

文部科学省生涯学習まちづくりモデル支援事業
2004 年度神津島村「生涯学習まちづくり」委員会

ご記入にあたって

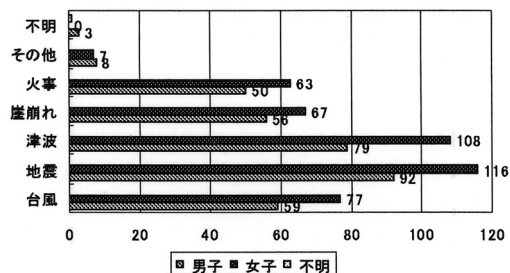
- このアンケートの回答は、必ず本人が行ってください。
- 回答欄について、思ったことを正直に記入してください。
- 回答は、あくまでも回答者自身の意見（口）の中に書き込んでください。
- このアンケートの結果は、直学で調査に活用いたしますので、個人のご意見をあげることにはあ
りません。（匿名の回答はありせん）

【お問い合わせ】
〇調査の進行・内容について
神津島村役場 総務：中村 昭二（電話番号 049-92-8-0011 fax 049-92-8-1242）
東京都立神津高等学校 総務：田中 清章（電話番号 049-72-2-4601 fax 049-72-2-4601）

（1 ページ）

図 4 アンケート表紙

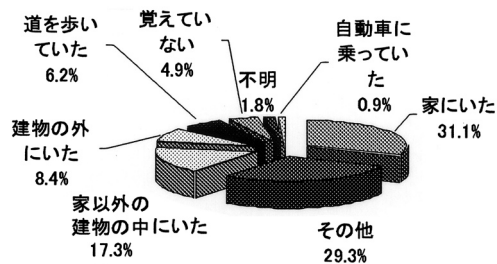
・男女別集計結果



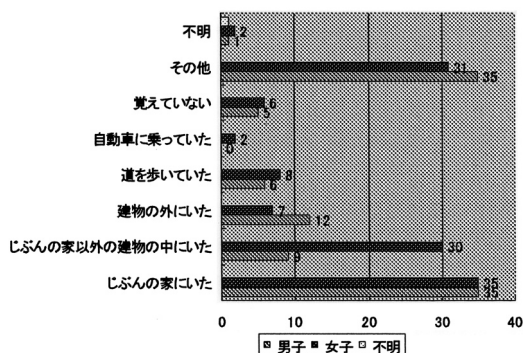
Q6:「地震」ということばから何が思いうかびますか？
自由にかいてください。

・回答上位順に、「がけ崩れ、土砂崩れ、地滑り」(21)、「破壊(建物、道路、もの)」(19)、「揺れる」(18)、「神津近海地震」「津波」「怖い」「地割れ」(11)、「火事」(10)、以下、「津波」「死亡」、「新潟地震」、「噴火」、「悲惨、絶望、不幸」、「スマトラ沖地震」など

Q7:平成12年7月1日午後4時ごろ、神津島では大きな地震がおきました。このとき、あなたはどこにいましたか？

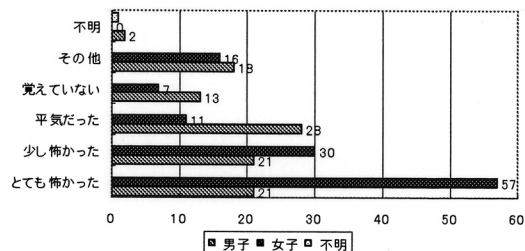


・男女別集計結果

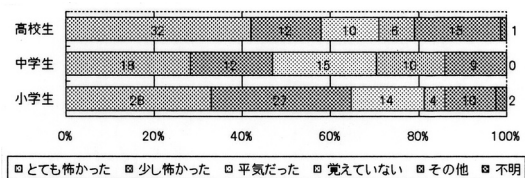


Q8:地震がおきたとき、どう思いましたか？

・男女別集計結果

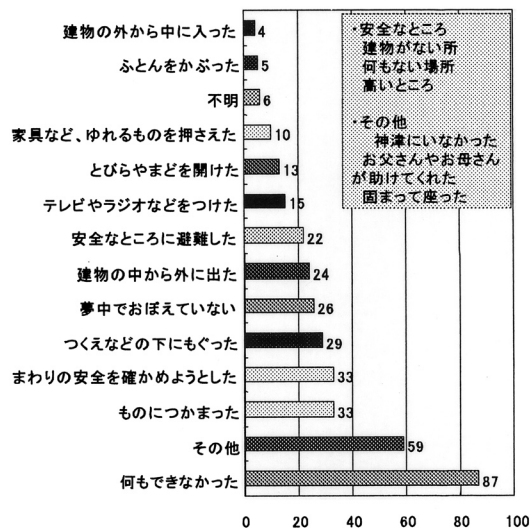


・学年別集計結果

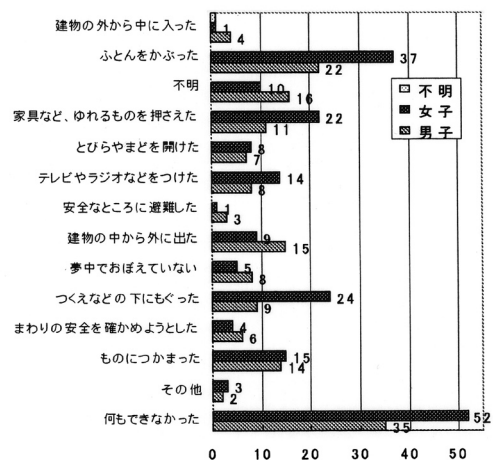


・地震当時、中学生、保育園児だった子どもたちが、「とてもよかった」と回答している。

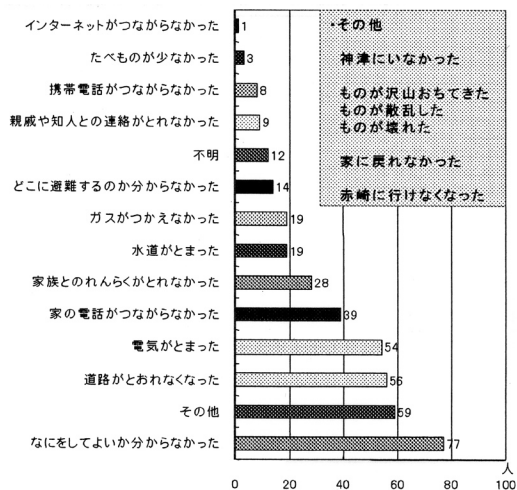
Q9:地震がおきてから、ゆれがとまるまでの間、どのようにしましたか？



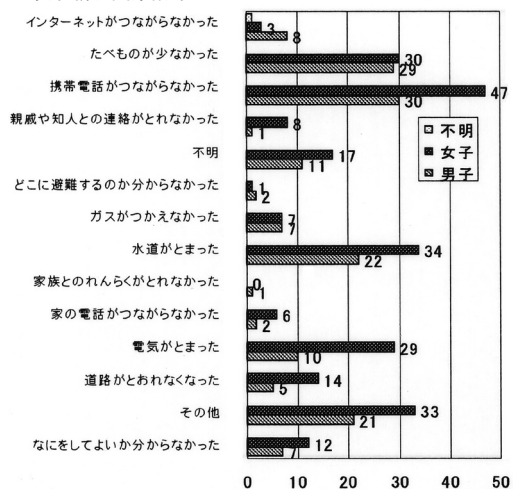
・男女別集計結果



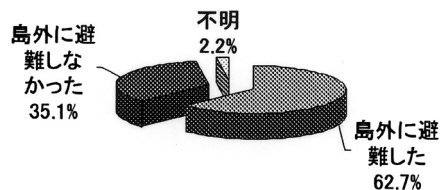
Q10: この地震がおきて、こまったことは何ですか？



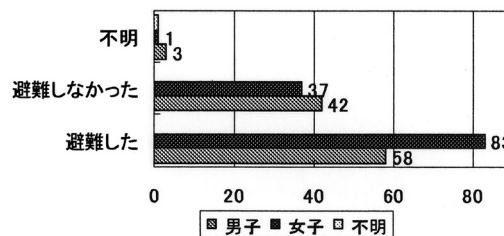
・男女別集計結果



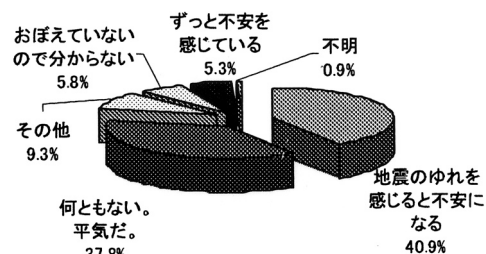
Q11: この地震がおきて、島外に避難しましたか？



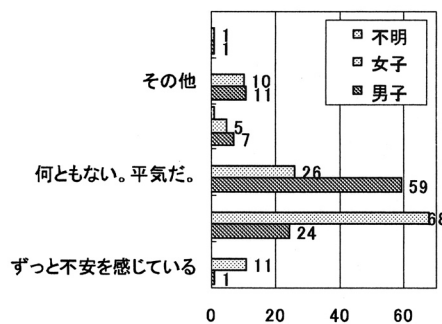
・男女別集計結果



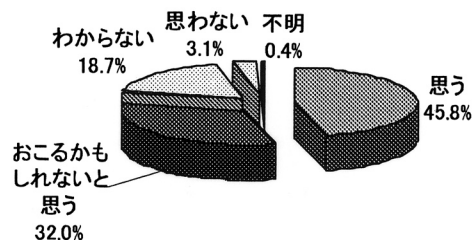
Q12: この地震から4年たちましたが今はどう感じていますか？



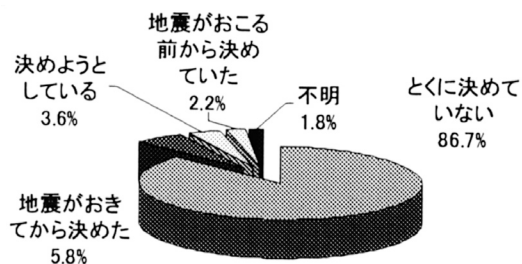
・男女別集計結果



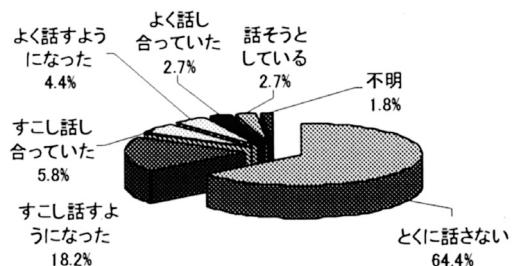
Q13: このような大きな地震が、またおこると思いますか？



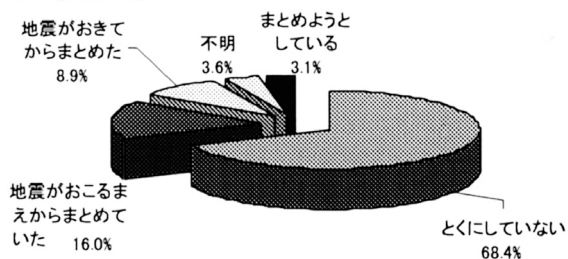
Q14：昼間に災害がおきて、家族が離ればなれになったとき、家族とのれんらく方法や、どこで会うかを決めていますか？



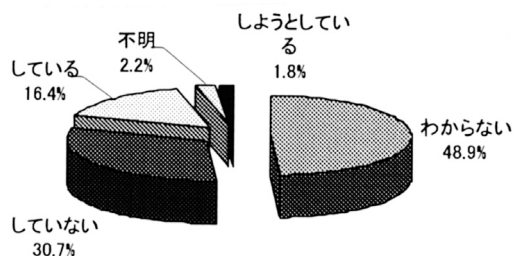
Q15：災害について、家族と話しあったことがありますか？



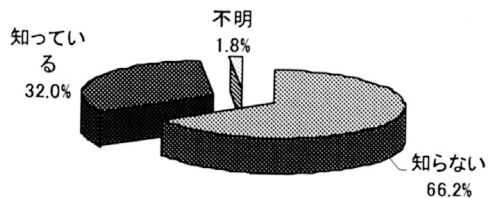
Q16：あなたの家では、大地震がおきた場合のために、必要な荷物をまとめていますか？



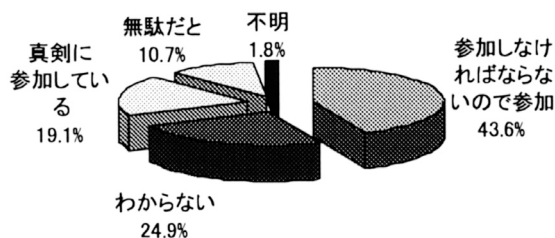
Q17：あなたの家では、大地震が起きた場合のために、家を強くしたり、家具が動かないように工夫していますか？



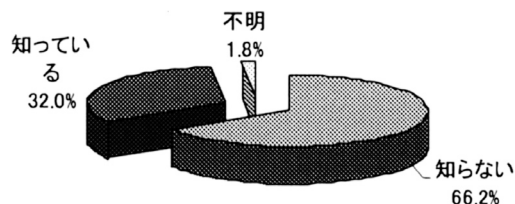
Q18：地震や台風がおきたときの避難場所を知っていますか？



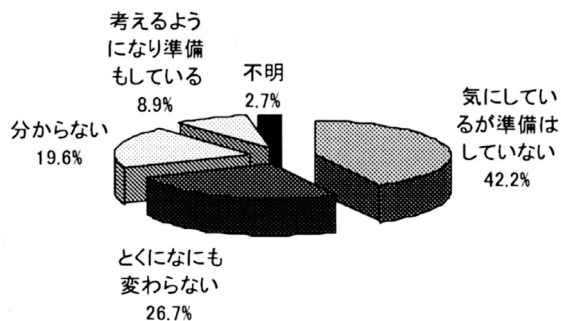
Q19：学校の防災訓練に、真剣に参加していますか？



Q20：困っているひとたちを助ける活動を、ボランティア活動といいます。災害のとき、あなたは、ボランティア活動をしたいと思いますか？



Q21：4年前の大地震で、防災にたいする意識はどう変わりましたか？



A report about a plan of a town on the basis of the Lifelong Learning / 2004.

“A plan to make a livable island for senior citizens /Kozu-island,Tokyo”

(2006.3.15 受付 2006.5.17 受理)